

見てみよう！歴史地震記録と

旬のあいち < 4 月 >

S	M	T	W	T	F	S
				1	2	3
4	5	6	7	8	9	10
11	12	13	14	15	16	17
18	19	20	21	22	23	24
25	26	27	28	29	30	

ごみようわじゅう

五明輪中

所在地：弥富市五明町

交通：JR 関西本線「弥富」駅 西 約 500m

愛知県西部、濃尾平野のゼロメートル地帯は、水との闘いを繰り返してきた地域です。長野県中部の鉢盛山を水源とする木曽川と、岐阜県郡上市の大日岳を水源とする長良川は、濃尾平野で揖斐川と合流し、伊勢湾に注いでいます。この大河は洪水のたびに流路を変え、昔から数多くの恐ろしい水害をもたらしてきました。江戸時代に入り、徳川家康の命により東側にはお囲い堤が築かれ、尾張藩は水害から守られるようになります。その後、薩摩藩士が命がけで工事を行った宝暦治水を経て、明治になるとオランダ人技師デ・レーケによる本格的な改修が行われ、三川分流が実現しますが、昭和 34 年の伊勢湾台風で大きな被害が発生するなど、現在に至るまで治水の努力が続けられています。

弥富市はこの木曽三川の下流域に位置し、木曽川とその支流の堆積土で形成された沖積層からなる地層で、輪中も存在する場所です。ここでは、地震で堤防が損傷したことによる浸水や、関連する水害も数多く発生してきました。

宝永 4（1707）年宝永地震の際には、堤防の陥没・崩壊が起こり、翌年から数年間水害を蒙ったという記録が残されています。また、嘉永 7（1854）年安政東海・南海地震でも、堤防の陥没、浸水、田畑の沈下が起こり、翌年には高潮被害にあったという記録が残されています。写真の五明輪中（現在の五明町付近）では、宝永地震の際に堤防が



五明輪中

ことごとく切れ、一面海になったと伝えられており、この翌年の宝永 5（1708）年から正徳 5（1715）年にかけては 5 度の高潮・高波による被害にもあっています。

このように、堤防で守られたこの地域ではこれまでに、地震により堤防が損傷し河川から浸水することによる被害の経験や、堤防が損傷した状態で台風や高潮、高波が襲い、複合的な災害として被害が拡大した経験をしています。地震により堤防が損傷する場合には、津波が到達する前に河川からの浸水が始まる可能性があります。平野が広がるこの地域では近くに高い場所がないこともあるため、地震が発生した場合にどこへどのように避難するかを常に頭の片隅に置いておく必要があります。

さらに、堤防が損傷し浸水してしまうと、ゼロメートル地帯であるがゆえに、長期的に湛水状態にさらされる可能性があることにも気をつけなければなりません。

先人たちは、度重なる水害から生活を守るために、輪中を築き水防共同体を構築しました。また、洪水の際に避難する助命壇を設けたり、石垣の上に設置した水屋に備蓄食料ともいえる物資の準備をしていました。現代では治水の発達により水害の可能性は以前より低くなっていますが、地震の発生により堤防が損傷する可能性もあります。

先人たちの知恵に学び、水防意識を高めること、水の届かない高いところに備蓄を準備することなど、浸水に対する備えを考えてみる必要があるかも知れません。



助命壇（海津市 HP より）



◆ 地震にまつわる碑や史跡には、実際にその地域で起こったことが記録されているだけでなく、当時の人たちの思い（二度と被害を繰り返さないように、など）が込められています。碑や史跡の前では、地震が実際にこの地域で起こるということを実感していただくとともに、そうした先人たちの声に耳を傾け思いを巡らせ、身の回りの備えにつなげ、これからの防災に活かしてください。

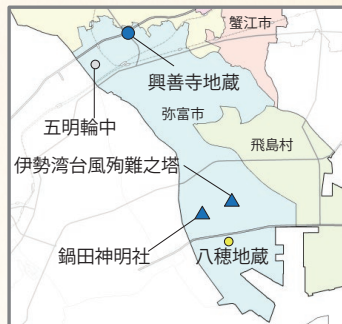
◆ 五明輪中の周辺には…

● 興善寺地蔵

所在地：弥富市荷之上町

交通：JR 関西本線「弥富」駅 北約 1.2km

興善寺は白頭に建立された寺院です。このあたりは、天正 13（1586）年の地震で陥没し、白頭池ができています。明治 24（1891）年濃尾地震の後、村人がこの池を浚えた際に、2 体の地蔵尊を探り当て、それが荷之上区の墓地に安置されており、毎年 3 月に供養祭が営まれています。



● 八穂地蔵

所在地：弥富市鍋田町

交通：弥富市コミュニティバス「鍋田」停 北約 250m

現在の鍋田新田の一部にあたる八穂新田は、江戸時代の末から干拓が行われましたが、水害により何度も破堤を繰り返し、嘉永 7（1854）年の安政東海・南海地震と翌年の暴風雨により亡所となったとされています。地蔵は 20 年後に引き揚げられたもので、干拓を築き上げた先人の偉業の歴史を物語るものとして、弥富市の文化財に指定されています。



◆ 詳細な地図は『歴史地震記録に学ぶ 防災・減災サイト』（<http://www.pref.aichi.jp/bousai/densho/index.html>）をご覧ください。

★ やとみ春まつり

水と緑の郷、弥富では、桜の季節に桜堤で祭りが行われていました。それが全国的に有名な金魚や文鳥の品評会を中心とした商工まつりとなり、現在は「やとみ春まつり」として、4 月上旬に弥富市文化広場で開催されています（平成 27 年は 4 月 4 日、5 日）。昭和 55 年からは、春まつりに花を添えるミスコンテストも開催されています。



特産物の金魚や花卉の品評会を始め、各種イベントが行われ、会場横の桜堤の満開の桜と相まって、毎年大きな盛り上がりを見せます。特に金魚の品評会は、日本有数の生産地弥富とあって、遠方から足を運ぶファンも見られます。

4 月のあいちの花

平成 27 年 4 月のあいちの花はデルフィニウムです。つぼみの形がイルカに似ていることからこの名前がつけました。花卉状のものはがく片で、本来の花びらは小さく中心に集まります。ブルー系の花が特に美しく、本来は毎年花を咲かす多年草ですが、日本では夏の暑さに耐えられず、秋まきの一年草として扱われるのが一般的です。



● ブレイクタイム ●

♪ 弥富金魚

弥富市では、市販されている金魚のほとんどの種類を生産し、中でも高級金魚の産地として全国に知られています。

弥富金魚の始まりは、約 150 年前にある金魚商人が、前ヶ須の宿場町で金魚を休ませる池を作って放したところ、その愛らしい姿に魅せられた寺小屋の権十郎が気に入って購入し飼育を始めたこと、と言われています。流通拠点としても我が国有数の市場となっており、日本にいる金魚の全品種である約 25 種類がすべてそろそろ一大産地で、10 月には金魚日本一大会も開催されます。

弥富市民俗資料館では、そのうち 22 種類の金魚を見ることができます。また、江戸時代にさかのぼる金魚養殖の歴史は、2 階展示室の「シアターやとみ」やビデオコーナーで楽しく学ぶことができます。



『弥富市民俗資料館』

所在地：弥富市前ヶ須町野方 731

交通：JR 関西本線「弥富」駅 徒歩 10 分

◆ この地域の地震・津波に関する碑・史跡、資料・体験談集、地域に残る古文書、研究資料、郷土史研究者・団体などの情報がありましたら、gensaian2014@gmail.com まで情報をお寄せください。

◆ 県内の歴史地震記録をホームページで紹介しています。各地の碑や史跡等にご興味をお持ちいただけましたら、『歴史地震記録に学ぶ 防災・減災サイト』（<http://www.pref.aichi.jp/bousai/densho/index.html>）をぜひご覧ください。

（発行：減齋の会（仮称）・名古屋大学減災連携研究センター 平成 27 年 4 月）